

巻末ではあるが、本書の意図を記しておきたい。端的に言えば、日本の近代化の道において、イタリアが誇ってきた独自のプレゼンスを示すことであった。いわば日本にとってのイタリア文化の本質性をうつつたえ、反論や異論を誘発し、今後の様々な議論に資するよう望んでいる。

日本にとってイタリアは特異なポジションにある。欧州の強国に比べ、モデルではなかった。ダンテのよいうな古典も、第一章で強調されるように、イタリアというよりはヨーロッパを代表していた。その一方で、「ルネサンスという単語はその中心にイタリアのイメージを内包している」(第六章)との、雑駁さを回避する主張もある。どちらも一理あるのだが、イタリア発祥の輝かしきは欧州の文物とする場合、日本はイタリアを同等と見做し、コンプレックスを抱くのではなく、親しみあるいはいくらか羨みの対象としたいのであった。英仏独との場合と違い、日本とイタリアと、なんでも無批判で受け容れてしまうような生半可な関係にはなかつた。またイタリアにオルタナティブな視点を期待する傾向もあつた(現在もなお)。たとえば、

イタリア文化の本質性——あとがぎにかえて

土肥 秀行

フランス語が得意なマリネッティという詩人が、当代随一の作家ダンヌンツィオ批判の書を世に問い、また「未来主義」を掲げ速度を称揚し、自然主義に対抗する。こう指摘したのは、自身も西洋をシニカルに眺める森鷗外であった。鷗外の文人意識は一般化できないにせよ、そうしたイタリアの情報が「スバル」誌上にもたらされるとき、単にありがたいというだけでは不意識でもって読者は受け取っていたはずである。日本にとって多面的な付き合いのできる国がイタリアであった。その関係に深みや、替わりのきかない本質をみてもよいかと思う。

ただこれまで日伊の本質的關係に迫る例がなかった。日伊交流は『イタリア文化事典』や『教養のイタリア近現代史』といった書籍の一トピックとして扱われるに過ぎなかった。これらは二〇一一年のイタリア統一一五〇周年、あるいは二〇一六年の日伊国交一五〇周年を記念したものであった。イタリアにおいては、『イタリアと日本の四五〇年』*Italia-Giappone, 450 anni*との二巻本が、論より証拠で迫る浩瀚さで、「イタリアにおける日本」年を飾っていた。もう二〇年以上も前のことである。そして今回、日本にて、イタリアアロパーによってかつてない試みとして取り組まれたのが本書である。そのアイデアがいかに生まれ、具体化したか次にまとめる。

「イタリアの文化本」（製作段階での仮称）の企画が生まれたのは、完成から遡ること一年半、着任間もない大阪のイタリア文化会館代表者ジョヴァンニ（ジャンニ）・デサンティス氏のふとした一言からだった。日本でのイタリア文化批評史についての本がないのではないかと、いうのである。なくはないが、まとまった形での出版物はない、日本で大学教員をしていたこともある氏の指摘に納得できたのは、それまでに次の経緯をしていたからだ。二〇二二年のダンテ没七〇〇年の折に、日本におけるダンテというテーマがよく扱われていて、筆者も、イタリアやアメリカ、アルゼンチンからのリクエストに答えて、ダンテと日本に

ついて書き、喋り散らしていた。この機会に調べてみると、本書第一章にもあるとおり、明治後半にはじまるダンテ受容には相当の蓄積があった。それなのに自分は全く通じていなかったのである。さらに、シエナ外国人大学とカーン・ノルマンディ大学の共同研究「パスール」*Passiers*（文化の運び屋、かけはし）に関するなか、新大陸（南北アメリカ）でのイタリア文化振興の担い手について知る機会があった。それは当時頻繁に行われていたオンラインシンポジウムのひとつ（二〇二二年八月）であったが、出版社、翻訳家、文化担当外交官など、いわば裏方にもスポットをあてる試みで、昨今よくみられるアプローチに則っていた。たとえばアルゼンチン出身で、一九六〇年代をローマで過ごした詩人ファン・ロドルフォ・ウイルコックについてのパネルが二つ続いたのには驚いた。彼は、様々な言語で翻訳や情報発信に努めた。詩人で映画監督のパゾリーニとも交流、彼の監督作『奇跡の丘』では、憤怒の代名詞カヤパの役を演じた。終始苦しい表情が印象的だ。合衆国やブラジル、アルゼンチンでのイタリア研究にイタリアからの移民の子孫が関わる場合——それは決して低い率ではない——自らのアイデンティティの問題とオリジンに拘泥するのは、ある意味、当然かもしれない。しかしわれわれにしても、先人から継ぐイタリア学の体系に歴史的考察を加えてみてもよいのではないかと思わされた経験だった。

こうしてイタリア文化の受容とイメージ形成についての共同研究が、論集のかたちをとっていくことになった。いつも行っているようなイタリア文化関連のイベントが、コロナ禍で実施できない代わりに、本の出版に情熱と予算を注いでくれたデサンティス氏が、企画を実現へと牽引してくれた。筆者はその実務を担当しつつ、氏とアイデアを固めていった。もちろん万全の態勢を敷くのに集ってくれたイタリア学のエキスパート——一名こそが最大の功労者である。おかげで、文学中心でありながら、思想や多種の芸術形態をカバーする絶妙のバランスが図れた。共同研究の有機性は、オンライン盛期に月一で重ねられたミーティング

によって担保された。研究会のような集まりをはしごととするプロセスがない代わりに、オンラインでのコンスタントな相互参照によって、各章の棲み分けができていったのだ。ひとつ例を挙げると、第二章と第一一章におけるダンナンツイオについての言及の補完性をみてほしい。前者では文学におけるダンナンツイオ・ブーム、後者では演劇におけるダンナンツイオの不振が、メリハリをもって描かれる。芥川龍之介にたつては、二、三、七章をまたぎ、イタリアの文学と思想との関連が問われる。

加えて、単なる寄せ集めとならなかったのは、もともとあつたチームワークが効いたからであろう。執筆者の多くが、関西イタリア学研究会 ASSIKA という、あえて緩く繋がり持続性をもたせたネットワークに属しており、すでにコミュニケーション手段と信頼関係をもっていたのである。七年をこえる ASSIKA の活動がここに結実している。われわれは、常々、本でも作ろうと言いつつ合ってきた。

論集の射程をどう設定したか。先に挙げた『イタリア文化事典』や『イタリアと日本の四五〇年』のように大部ではなく、全てを余すところなく細かく語り尽くすというよりも、要点とアウトラインがくつきり浮かび上がるよう努めた。というのも一般書として、多少意識の高い読者層や、執筆陣が普段相手にしている大学生をターゲットとしたからである。一部の研究者やイタリアフリークよりも広い層に届くよう考えられている。そうして日本におけるイタリア文化の理解者を増やしていく意図がある。分量や内容は、専門書ではなく選書レベルに控えてある。註を排した理由も普及を第一とするためである。替わりに、さらなる一歩につながる参考文献一覧はしつかりと付けてある。たとえば大学の卒論にむけたテーマリサーチと資料探索に有用となるように。

論の運び方をどのようにするか。執筆陣による話し合いで有効性が認められたのが、「一対一対応×五」なる型である。一つの対象（作者もしくは作品）について一人の学者が拘りをもって導入を図っている、こ

うした組み合わせを五つ展開させていくと一章分になる、という現実的なアプローチである。決してマストではないが、この型を採用したのが第二、四、五、六、七章、特に思想にまつわる章である。個人における異国の思想の血肉化が、より大きな文脈での普通化へと昇華するダイナミクスこそが、思想の歴史である。とはいえ、一対一対応における個々の事例の必然も問われるべきである。たとえば、須賀敦子がいなければギンズブルグやモランテは紹介されなかつたか、たまたま彼女が興味をもつただけなのではないか、そのように批判的にみることも可能である。もちろんひとつひとつは偶然のようにみえて、全体の流れには整合性があり、偶然も必然もない。正しきはどこにあるのかはわからない。ただ、一対一対応のような程度の図式化は、入口としての理解には役立つと強調しておきたい。

こうした切り口の問題について続けたい。要点のみの場合、取捨選択でも、捨てる方に頭を悩ますことになる。筆者が強い文学方面では、バロックの文学が、まるで日本に届いていないかのように、すっぱり抜けている。イタリアの国民文学であるばかりか、日本でも同様の機能を果たした『ピノッキオ』と『クオーレ』について語らず仕舞でよいか。一九世紀後半の自然主義であるところのヴェリズモ、その代表者たるヴェルガの扱いがおろそかでないか。これらの問題については個々の事情がある。バロック文学については、単体としては日本では意識されず、バロック全般が美術の範疇で語られてきたため、文学セクションの枠内で取り出しにくい。それは前衛（未来派）が、文学ではなく（総帥マリネットイは詩人であるとはいえず）、美術の分野で専ら語られてきたのと同じであろう。また、一九世紀の難しさは、イタリア統一を押し、汎欧的な様々な芸術風潮が流れ込み、単一でない時代のコンテクストを作ったことにある。一九世紀は、ひとこと言え、ロマン派とその余波の時代だが、一筋縄ではいかなない。いわゆる児童文学やリアリズム運動を、「一九世紀」の名のもと同軸上に載せるのは難しい。それらがやむなく捨てられた所為である。その

他の指摘もありうるはずである。多くの批判を、本書を補完しうるものとして積極的に受け入れていきたい。要は、欠落は、うっかりでも軽視でもなく、やむにやまれぬ選択ゆえであったということである。また、われわれの力量不足というか、状況がゆるさず時期尚早というか、及ばなかった領域もある。各章を構成するジャンルにとつて、メディアの問題は重要で、検討対象を、なにも既存の書籍や芸術作品に限定する必要はなかった。オペラの対訳の多くはCDやレコードの付属スリーブに印刷されてきた。一九九〇年代以降の世代に対し、イタリア文学に興味をもつきっかけを作ってくれた須賀敦子については、創作は全集として纏まっているものの、訳業はバラバラなままで総覧が存在するわけでもない。たとえばオペラ「トロヴァトーレ」の対訳は、CDと共に出されただけでそのまま忘れられている。また、須賀からの連想だが、彼女の作家活動の発端となった雑誌『SPAZIO』（日本オリベッティがかつて発行していた文化誌）は、アカデミズムと芸術性の調和した、センスの光る雑誌であった。一九七〇年の創刊から紙媒体での刊行をやめる二〇〇三年まで、日本の文化シーンに与えた影響は小さくない。このまま忘れ去られてしまうにはあまりに惜しい「文化財」である。

文化のオペレーターを総合的に勘案し、先人発掘に努める南北アメリカのイタリアン・スタディーズに倣えば、外国文学はまた、翻訳家のみならず出版社の努力によつて伝播する。須賀登場以前、一九七〇年代と一九八〇年代のイタリア語からの翻訳本は大抵、大久保昭男、もしくは千種堅の手によるものであった。近年イタリアで表彰されている訳者たち、和田忠彦そして栗原俊秀には、米川良夫という先達がいた。白崎容子や関口英子は、翻訳のみならず、板橋区における絵本の翻訳コンクールを、審査員として三〇年近く支えてきた。イタリアの出先機関であるイタリア文化会館では、ピーコ・デッラ・ミランドラ賞、そしていまはフォスコ・マラーニ二賞によりイタリア関連の研究者を奨励する一方、須賀敦子翻訳賞で翻訳の世界に光を

当てている。歴代の受賞者と受賞作は、その年代毎の関心の方向性を示している。

出版界には、それぞれの時代を代表する叢書が存在した。戦前の叢書については、第一、三、五章に言及がある。戦後においては、ネオレアリズモ映画と文学からパヴェーゼとモラヴィアのブームへとという全体的な傾向が認められる一方で、一九六九年に計画された早川書房の「現代イタリアの文学」（全一二巻十別巻一）は、戦後まもなくの反ファシズム文学から一九六〇年代の実験主義まで取り上げる、密度の高いラインナップであった。一九八〇年代以降、京都の松籟社が「イタリア叢書」としてこれまで九冊の翻訳本を刊行している（さらにダンヌンツィオ薔薇小説三部作、フォスコ・マラーニの名著『随筆日本』まで）。時代に流されない、二〇世紀の伝統ともいえる文学作品が並ぶ。本書が同社から出るのも、こうした文脈にあやかるためである。一九九〇年代には、東京書籍が立ち上げた「シリーズ・新世代のイタリア文学」から計六冊が刊行され、現在ベテランの域にいる作家が若手として紹介されている。雑誌の特集も見逃せない。『ユリイカ』には記念すべき号がいくつかあった（第三章で引用されたカルヴィーノ特集号の他、特に戦後と抵抗世代を繋ぐ特集「現代イタリアの詩と映像」、一九七四年四月号）。ともすればエーコ、カルヴィーノ、タブッキくらいしか挙がらないイタリアの作家だが、戦後の長い期間に、メジャーとマイナーの出版社から、様々な名が紹介されてきたのである。

展覧会カタログもよい契機を為す。たとえば、ひとつひとつが短く、膨大な数が存在する未来派の宣言文がまとめて読めるのは、一九九二年の未来派展カタログにおいてである。一九八〇年代半ばの『ユリイカ』や『美術手帖』の未来派特集も見逃せない。

映画に欠かせない字幕を忘れてはならない。イタリア映画を観るたびに見かける「字幕 吉岡芳子」とは何者だろう。何十回と目にしていても、一向に実体が伴われないのだが、光文社古典新訳文庫のインタール

ネットサイトの連載「字幕マジックの女たち」にあるインタビュをぜひ読んでみてほしい。近年は、イタリア文学方面から岡本太郎や関口英子も字幕を担当するようになり、訳者が充実している。

そもそも日伊関係について考えるのは、執筆陣のほとんどにとってはじめての経験であった。文学者はテキストと向き合う、テキストが読めてなんぼ、そうした矜持（意地ともいう）ゆえ、背後の文脈に目配りしないばかりか、取り上げる対象が、書籍中心になりがちであった。専門家は柔軟性に欠ける。筆者の専門に照らせば、日本におけるイタリア文学像を作ってきた人たちについて、あまり知らないままここまで来た。一般に、体系的な知識も存在しない。本書ではじめて本格的に受容について考えてみることで、その系譜に属す自らについても、客観的にとらえる機会に恵まれた。

もうひとつ、われわれに眼界があつたとすれば、構成は分野ごと（縦割り）、そして時代ごと（横割り）となつてしまつてゐる。明治末期、西洋の詩を名訳で紹介した上田敏のアンソロジー『海潮音』において、ダンテとダンヌンツィオ（上田はダンヌンチオと、二重子音Nに忠実な表記をしたが、しばしばダンヌンツィオと日本では書かれてきた）が日本の読者に初お目見えした（上田の名は第一章でも挙がつてゐる）。ダンテは古典、ダンヌンツィオは同時代人であるが、場を同じくし、同じタイミングで呈示される。本書第一章でダンテを、第三章でダンヌンツィオやピランデロを扱つてゐるが、日本には同時に入つてきていたのだから、章をこえて共時性を想像してもらわねばならない。

付け加えれば、『海潮音』には三人目のイタリア語詩人がいる。アルトゥーロ・グラフ（アルトゥロ・グラアフと表記）との、現代イタリアでは全く忘れられてゐるローカル詩人である（歴史的価値はある）。詩歌集は、ダンヌンツィオにはじまり、ダンテを経由し、グラフに至り、ダンヌンツィオの再登場によつて閉じられる。英詩撰を底本としてゐるからとはいえ、はじまりにおける混淆状態は、ある意味、整合性なき受

容を予言している。できるだけ要点を繋いでいく本書では割愛されているが、「闖入者」グラフ以降も、突発的な出来事がしばしば起こつてゐる。

いまからみると相当キツチなことと映るが、近代化を急ぐ日本にとっては、古いものも新しいものも新しさとして取り入れるのは当然の姿勢であつた。それも偏向があり、ダンテが明治半ばに紹介されたとき、哲学者のようにとらえられ、のち文人としての側面が浮上した。レオパルディも同じ道を辿つた。思想と文学は、たしかに一体である。ただ、思想が半歩先に行く。イタリア思想の、他ジャンルに対する先駆性は常に指摘できる。近代化まっしぐらの日本の期待にも沿つてゐる。このケースにもみられる、いわゆる

「政治性」とは、第一章の文学や、第九章の音楽における取捨選択の決めてとなる要素であつた。「イタリア文化の本質性」と言つてみたものの、本質論は、一般的には、硬直化の危険性をはらむ。第一、八、九章のように、文学・美術・音楽の分野での明治日本の文化政策を勘案しなければならない場合、その上で、イタリアが本質であると主張するのは一種のファンズムと映りうる。むしろ、国家的な文化戦略があるなかで、苦勞させられたのが日本のイタリア文化であり、京大イタリア会（第五章）のような、われわれのASSIRKAにも似た自発的集まりが、ひとつの起爆剤となつてゐたとの認識は重要であらう。下からの支えによる本質性こそ、この本が呈示しなかったものである。

執筆陣にとつての支えといえ、松籟社の木村浩之氏であつた。要所要所での的確かつ冷静なアドバイスと判断、細やかな校正作業に対し、編者と執筆者を代表しお礼申し上げる。

イタリアの文化と日本
——日本におけるイタリア学の歴史

2023年2月28日 初版発行

定価はカバーに表示しています

編者 ジョヴァンニ・デサンティス、土肥秀行
監修者 イタリア文化会館・大阪
著者 石井元章、石田聖子、フランチェスコ・カンパニョーラ、
菊池正和、國司航佑、霜田洋祐、高田和文、原基晶、
星野倫、森田学、山崎彩

発行者 相坂一

発行所 松籟社（しょうらいしゃ）
〒612-0801 京都市伏見区深草正覚町1-34
電話 075-531-2878 振替 01040-3-13030
url <http://www.shoraisha.com/>

印刷・製本 モリモト印刷株式会社
カバーデザイン 安藤紫野（こゆるぎデザイン）

Printed in Japan

© 2023 ISBN978-4-87984-436-1 C0070

La civiltà italiana in Giappone: un bilancio storico degli studi italiani in Giappone

a cura di Giovanni Desantis e Hideyuki Doi
con la supervisione dell'Istituto Italiano di Cultura Osaka

Indice

Giovanni Desantis, <i>Prefazione</i>	6
Letteratura	
1. Motoaki Hara, <i>Da Dante al Rinascimento: studi umanistici e traduzioni</i>	15
2. Yōsuke Shimoda, <i>Aperture illuministiche e novità romantiche</i>	47
3. Masakazu Kikuchi, <i>Le strade della letteratura tra Primo e Secondo Novecento</i>	69
4. Aya Yamasaki, <i>Il mondo descritto con le parole delle donne</i>	97
Filosofia	
5. Hitoshi Hoshino, <i>Da San Francesco e Tommaso d'Aquino ai primi umanisti</i>	123
6. Francesco Campagnola, <i>Dall'idea di Rinascimento allo storicismo vichiano</i>	147
7. Kōsuke Kunishi, <i>Dal neoidealismo al pensiero contemporaneo</i>	175
Arte, Musica, Cinema e Teatro	
8. Motoaki Ishii, <i>Insegnamento e studio della storia dell'arte, collezionismo, mostre espositive</i>	203
9. Manabu Morita, <i>La musica italiana: musicologia e piacere della musica</i>	243
10. Satoko Ishida, <i>L'impatto della spettacolarità cinematografica</i>	267
11. Kazufumi Takada, <i>Da Pirandello a Fo: il rinnovamento del teatro italiano</i>	295
Hideyuki Doi, <i>Postfazione</i>	323

PREFAZIONE

Giovanni Desantis

Questo libro nasce da una constatazione: mancava ancora nel panorama editoriale giapponese un'opera di sintesi che tracciasse un bilancio storico e critico della presenza e dell'influenza esercitata dalla cultura italiana nel Giappone moderno, dall'epoca Meiji a oggi.

A questo bisogno di sintesi non soppravano alcune, anche pregevoli, raccolte miscellanee di studi comparse negli ultimi decenni.

A fronte della fioritura di studi sull'arte, sulla letteratura e sulla cultura italiana nelle sue varie declinazioni, parallelamente all'istituzione di un certo numero di insegnamenti universitari, che hanno distinto gli anni più recenti, si avvertiva la necessità di colmare una seria lacuna, fornendo al pubblico colto giapponese un'opera di sintesi sulla storia dell'italianistica in Giappone. Non solo in senso meramente istituzionale, quanto piuttosto in termini di ricezione, reinterpretazione e impatto sulla cultura giapponese.

L'idea, nata tra me e il professor Hideyuki Doi, trovò un'accoglienza entusiastica da parte di un nutrito gruppo di specialisti, quasi tutti giapponesi, ma anche con una presenza qualificata italiana, e il risultato dei loro sforzi è il libro che abbiamo dinanzi, a coronamento di oltre un anno di lavoro.

Al netto delle inevitabili omissioni di figure, scuole, testi e incompletezze

序

ジョヴァンニ・デサンティス

本書の着想は次の見解にもとづく。明治以降の日本におけるイタリア文化の存在感と影響力について、歴史意識と批評眼をもって迫った概略書はないのではないかと、というものである。

この欠落を埋めるのは、これまで論集や研究誌に発表されてきたような研究では難しいであろう。大学レベルでの教育研究が盛んになるにつれ、イタリアの芸術や文学、文化全般についての理解が日本社会で深まってきた。そのような流れがはじまって久しいが、専門家が集い、アカデミア向けではなく、意識の高い一般層を念頭に、イタリアの文化がいかに受容され、再解釈され、浸透していったかを論じる場が、ようやく今回設けられることになった。

構想は、私と土肥秀行氏とのあいだで練られ、各分野の研究者から順調に理解と同意を得ていった。日本からだけではなく、イタリアからも優れた研究者の参加をみて、執筆陣をかためたのち、約一年で成果物を世に問うところまできた。

tematiche in un'opera, che ha dovuto essere contenuta entro certi limiti per ragioni editoriali, essa getta le fondamenta di un'analisi critica, in un arco storico ben determinato, e ambisce a diventare un punto di riferimento per chi desidera farsi una ragionevole idea dell'importanza, anzi di quella che Doi nella sua ampia *Postfazione* definisce "presenza essenziale" della cultura italiana nel Giappone moderno.

L'articolazione dei saggi (distribuiti nelle sezioni "Letteratura", "Filosofia, Arte, Musica, Cinema e Teatro") ha fatto posto, in una tradizionale scansione cronologica, anche a tematiche meno frequentate come il pensiero filosofico, il teatro, il collezionismo d'arte e la letteratura femminile.

Dai qualificati - e tutti inediti - saggi degli autori emerge un' "idea dell'Italia" o meglio una serie di "letture" o "immagini" dell'Italia in dialogo fecondo con la cultura, la società e la storia istituzionale del Giappone.

Si tratta insomma di un rapporto poliedrico, sfaccettato e spesso di sorprendente intensità, in cui appare evidente lo sforzo critico degli intellettuali giapponesi nel confronto con una civiltà complessa e unica tra le civiltà europee, come quella italiana.

Emerge dall'insieme dei saggi che, in questa dialettica tra civiltà, il Giappone in qualche modo ridefinisce anche la propria identità.

Il libro si rivolge non solo al pubblico degli italianisti professionali giapponesi (professori, traduttori, bibliotecari, giornalisti, mondo universitario), ma anche e soprattutto al lettore colto giapponese, che vi troverà un affresco aggiornato, una ricca e solida informazione e molti stimoli alla riflessione.

Naturalmente, l'ambizione del libro è anche di essere punto di partenza per ulteriori ricerche e approfondimenti, di cui nel vastissimo campo dei rapporti tra le due culture vi è ampio pascolo.

Ringrazio il co-curatore Hideyuki Doi e tutti gli autori che si sono

取り上げるべき人物や作品、事項への言及がない、もしくは論じ方が不十分であることもあろう。編集方針に基づいて、扱う範囲が定められているからだが、限界があるにせよ、本書は、特定の時代と社会の文脈にむけられた批判的分析のための材料を提供しようと努める。さらには、日本におけるイタリア文化の重要性（土肥氏が言うところの「本質性」）を確認する手段であらうとする。

一一ある章は、三部（文学、思想、芸術）に分かれる。文学と思想の論考は、年代順に並んでいる。こうした構成はオーソドックスである一方、思想を柱のひとつとし、美術分野では様々なコレクションについても語り、演劇や女性による文学にも目配りするという新しさもある。

この本で展開される様々な議論は、あるひとつのイタリア像への収斂をみるであろう。と同時に、複数の

解釈やイメージが、日本の社会や文化との対比から湧き出てきて、本書を彩るであろう。日本に流入するイタリアと日本の関係は一様でなく、多面的でありつつも、深みのあるものとなっている。日本の知識人はイタリア文化は、欧州のなかでも特異であり、唯一無二である。そうした文明の力と、日本の知識人は取っ組み合ってきた。

どの論考からも、異文化間の弁証法により、翻って自己イメージの刷新が図られたことがわかる。これは、イタリアの文化が日本に及ぼした影響のレベルを示している。

本書を手にしていただきたいのは、イタリア学の専門家たち（研究、翻訳、出版、文筆、教育）に加え、アンテナを高く張っている読者層である。選りすぐりの情報から織りなされる文化のモザイクに、大いに刺激を受け、敏感に反応してもらえとありがたい。

と同時に、われわれが願ってやまないのは、本書が未来の研究への橋渡しとなることである。イタリアと日本のあいだには、これまで同様、今後も大いなる研究の可能性が期待しうるからである。

共編者の土肥氏をはじめ、その才能を余すところなく發揮いただいた一一名の執筆者の方々にお礼を申し上げる。また松籟社の、長きに渡る経験に裏打ちされた仕事振りに対し、心より敬意を表す。加えて、親交のある早稲田大学名誉教授の菅田茂昭氏と東京大学名誉教授の長神悟氏に、本書への助言に対し感謝の念を捧げる。

generosamente prestati a scrivere i vari capitoli, oltre alla Casa Editrice Shōraisha di Kyoto, che ha messo a disposizione la sua lunga esperienza tecnica e redazionale.

Mi è grato infine ringraziare i professori emeriti Shigeaki Sugeta dell'Università Waseda e Satoru Nagami dell'Università di Tokyo, cari amici di lunga data, che hanno salutato con simpatia e approvato il progetto di questo libro.

【目次】
イタリアの文化と日本——日本におけるイタリア学の歴史

La civiltà italiana in Giappone: un bilancio storico degli studi italiani in Giappone

a cura di Giovanni Desantis e Hideyuki Doi
con la supervisione dell'Istituto Italiano di Cultura Osaka

© Istituto Italiano di Cultura Osaka, 2023

This book is published in Japan in the form of joint publishing with
Istituto Italiano di Cultura Osaka.